

小学校家庭科にみる現代家族と生活 (2)

浅井 由美

はじめに

「小学校家庭科にみる現代家族と生活 (1)」において、小学校教諭ではない者が小学校家庭科をみるとき、家庭科が教えようとする家族と生活はどのように映るかを述べた。本稿では、とくに「時間」の側面から、小学校家庭科における家族と生活をとらえたい。

『小学校学習指導要領解説 家庭編(以降、解説と記す)』は、教科の目標「家庭生活を大切にする心情をはぐくむ」を解説する中で、「家庭生活の基盤には、家族などの『人』、衣服や食物などの『もの』、『時間』、『金銭』などの要素や、それらが関連し合って家族との関係や生活行為などがあることを、衣食住などに関する自立の基礎に必要な知識及び技能を身に付ける学習を通して気付くようにする」¹⁾と述べている。家庭は、他の組織と目的が違っても、ヒト、モノ、カネのシステムととらえることができる。

家庭に限らずどんな組織でも、ヒトが大切であることは明らかであろう。家庭も家族のメンバー一人ひとりが大切である。しかし家庭科教科書が多くのページを割くのは、衣食住のモノの側面で、家族やお金(ヒトやカネ)を直接扱うページは少ない。

家庭の資源の中でも、モノやカネは、あるところにはあり、ないところにはない。ヒトがもっているトキは、1日24時間である。家庭にとってトキは、モノ・カネとは異なる管理をすべき資源といえる。

現代ではモノ・カネが豊富になった一方で、家庭のトキ、時間資源(24時間×家族員数)は、小家族化によって減少している。消費生

活も遊びも、モノやカネとともにトキ、「時間」を必要としている。そして、「時間をお金で買う」という場合もあるように、現代人にとって「時間」は貴重になっている。

小学校家庭科が「時間」をどのようにとらえ、教えようとしているのか、現実の家族や生活とのかかわりの中で考えたい。

1 学習指導要領における「時間」

小学校学習指導要領第2章第8節家庭において「時間」が言及されるのは、「2内容A 家庭生活と家族(2) 家庭生活と仕事について、次の事項を指導する」の「イ」においてである。(2)のいう「仕事」とは「家族の生活を支える仕事」であるが、ペイドワークではない「家庭の仕事」のようである。その(2)の「イ」に「生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること」とある。

『解説』によれば、「有効な時間の使い方」とは、「時間に区切りを付けたり、計画的に時間を使ったりするなど、時間を主体的に使うことができることである」²⁾。「家族に協力する」とは、「自分の生活時間を工夫し、家族と共に過ごしたり、分担した仕事をしたりするなど、家族の一員として協力することである」³⁾。

ここで「時間を主体的に使う」とは「自分の生活時間を見直し、家族と共に過ごす時間や家族の生活に協力する時間を生み出すなど」、「家族の一員として協力すること」である。それが、家庭科のいう「自立」であり、その限りにおいての「時間の有効な使い方」ということになる。

また『解説』は、「A (3) の項目と関連させ、家族と共に過ごす時間の有効な使い方の1つとして、進んで家族との触れ合いや団らんを計画する学習も考えられる」⁴⁾と述べている。家庭科では、家族の触れ合いや団らんは計画するものになっている。計画的でなければ触れ合いや団らんができないほど、現代家族はそれぞれに忙しいことを反映しているともいえる。

2 家庭科教科書の中の「時間」

教科書で直接「時間」が取り扱われるのは、生活時間と朝の生活のかかわりにおいてである。開隆堂⁵⁾も東京書籍⁶⁾も、まず自分の生活時間や生活リズムを見直し、次に家族との時間の過ごし方を考え、さらに朝食の大切さ、朝食の調理へ移行する。「早寝早起き朝ごはん」と明記しないものの、それを推奨している。

開隆堂は東京書籍より生活時間にページを割いて、「家族と過ごす時間をつくるくふうの例」として、「夕食や朝食の用意を手伝うようにし、夕食のあとはテレビを消して家族で団らんすることにした」と記述し、「家族といっしょに過ごす時間がないときは、どんなくふうをするとよいだろうか」と問うている。そのすぐ横には、「家族とのふれ合いのくふう例」として、で「伝言メモ」や「連絡メール」を挙げている。

朝食の調理では、開隆堂、東京書籍ともに、「短時間でできる」「いためる調理」を記載している。食物の分野では、朝食以外のページでも、「手順よく効率的に」と強調されている。たとえば、「調理をするときは、下図のように計画を立て、準備をし、見通しをもって進めると、安全に、効率よく・・・」「調理の時間配分や手順を工夫しよう」「でき上がり時間を決めて、何をどのような手順で調

理するかを計画し、準備や食卓の用意なども考えて・・・」などである。

しかし教科書は、被服や住居の分野では、「時間」についても「効率」についてもほとんど述べていない。被服分野では、むしろ時間をかけて、実際の家庭では作らない、また使いそうもないものを手作りしている。家族が生活時間を過ごす住居分野では、「無駄な時間をなくすための整理整頓」を除けば、「時間」と関係する事項はない。

東京書籍教科書では「見直そう食事と生活のリズム」で「家族で協力して朝食を作れば、時間を短くできるし、家族とふれ合うこともできます」としながら、住居分野のページに、忙しい朝にそのようなことを可能にする広くて能率的なキッチンの記述はない。

3 家庭科の「時間」と現実の家族の「時間」

NHKの国民生活時間調査は、1960年から2000年までの生活時間の変化を、「時間に関する自己裁量性の拡大」と総括していた。それは、①仕事、学業、家事などの「拘束時間」が減少し「自由時間」が増加したこと、にもかかわらず、②必需時間の一つである睡眠時間を削減してまで深夜を活動の時間としていたことをさしていた⁷⁾。2010年以降の調査では、「拘束時間」は減少傾向にあるが、睡眠時間の減少は止まったという⁸⁾⁹⁾。

国民全体としては拘束時間の一つである仕事時間が減少しても、平日、男性有職者の仕事時間は長い。3割を越える人が10時間を越えて働いている。そこで、男性の家事や育児の時間は増加していても短い。また働く母親は、家事も育児も仕事もするため、睡眠時間が最も短い。さらに、生活活動の高速化がすすみ、1時間当たりにも多くのことをしようとする効率化が、忙しさを増幅している。

家庭科は、朝食に短時間でできる「いためる調理」であっても手作りを、朝以外の食物

も被服も手作りを重んじている。教科書は、時間的余裕のある「時間持ち」の専業主婦がいる家庭を標準として書かれているようだ。しかし、実際には、専業主婦は少数派となっている。

教科書に「家族とのふれ合いのくふう例」として「連絡メール」の記載があったが、情報化によって、職場など家庭外からのメールやケイタイが、家族の時間を侵食している。モノやカネが豊富でも、時間に追われて忙しい「時間貧乏」の家庭は多い。

また、時間に縛られず一人で好きな時間に行動したい「めいめい時間欲」「非同期型」、一人のほうに気楽で楽しい「自己充足型」など、大人にも子どもにも「時間に関する自己裁量性の拡大」がみられる。

さらに家庭によっては、親が子どもに、家族に協力するよりも勉強や習い事に時間を配分することを望む場合も多い。

実際に授業を担当した小学校では、親子ともに忙しくて無駄な時間はない、家庭科が求めている「生活時間を見直して、家族とのふれ合いの時間を工夫する」余地はないという意見が多かった。

家庭科は、個人の時間よりも家族の時間を優先させようとしている。これは、現代家族にとって一定の意味があるが、そうでなければならぬといいきれるだろうか。生活時間配分は、各個人や各家庭の価値観や目標に関係しているの、一概にこれが有効的とも正しいとも決められない。

また家庭科では、家族時間の優先の方策は、家庭の中だけでの工夫や協力、いわゆるヤリクリに限定されている。教育、労働、経済、社会全体の生活問題から家庭の生活問題を切り離して、子どもの「工夫」で解決するには限界がある。

『解説』は、「生活をよりよくしようと工夫する能力」とは、すなわち、よりよい生活

を目指して課題を解決する能力であり、家庭生活における身近な課題を様々な角度から考える思考力、考えたことを基に課題の解決を図るための判断力、自らの考えを的確に表す表現力などを含む¹⁰⁾としている。

家庭内の工夫や協力だけでは、生活課題を解決し、生活をよりよく改善することはできない。にもかかわらず家庭科は、「実践的」を強調しながら、家庭の社会的・経済的環境に目を向け働きかけようとはしない。生活を総合的科学的にとらえ、様々な角度から考えているとはいいがたい。

4 家庭科に求められる「時間」意識

タイムマネジメントは現代人にとって大切に、小学校からすでに教えられている。たとえば学校には「時間割」があり、計画的に時間配分をすること、時間を守ることが求められている。

最近では、大学の初年次教育にも「時間」が登場する。たとえば「時間に対するイニシアチブ」¹¹⁾、「作業効率のよい生活とは、毎日同じことをするような、規則正しい生活です。何をしているのかわからない時間、無駄を少なく、目的実現に向かっていかに有効に時間を使い・・・」¹²⁾、「行動記録の作成と分析、時間消費行動の状況の問題点を検討、目標設定と優先順位の決定」¹³⁾などである。

これらの大学初年次教育テキストの記述は、小学校家庭科の教科書の記述とほぼ重なる。家庭の「時間」は、学校の「時間」とも企業の「時間」とも違う。家庭科は、タイムマネジメントの基本を述べるにとどまっていた、家庭の「時間」の特徴に踏み込んでいないのではないだろうか。

家庭科教科書では、「家庭の仕事」にも、「楽しい団らん」にも、PDS (PDCA) サイクルのようなものが繰り返し登場し、計画性、合理性が強調されている。しかし、家庭の仕

事にも、家族団らんにはもっと、非効率で非合理的な側面があり、それが家庭と他の組織の違いでもある。

私たちの生活には、スピードや効率の追求が意味をもたないもの、むしろ時間の浪費、非効率にこそ意味があるもの、時間をかけて何年も待つことが楽しみで価値をもつものがある。たとえば、自然保護、芸術、趣味、そして家庭生活である。

日本の家事は、「世界に類のないこぎれいさ、清潔さ。衣食住のすべてにわたってはたらいっている、繊細な美的感覚。念入りの育児法と熱心な教育。このような生活文化の高度の洗練・・・」¹⁴⁾ともいわれていた。家庭科教科書の「家庭の仕事」をみると、計画性、合理性、効率優先で、家庭での生活文化の伝承の困難を感じる。

家庭には、育児や介護のように効率の追求とは相容れない時間がある。家庭はペイドワークとして保育や介護をしているわけではない。手際よく衣食住のマネジメントができることも大事だが、それだけで家庭生活は成り立っていない。

生まれたばかりの子どもの「時間」、幼い子どもが夢中に遊ぶときの「時間」、学生の「時間」、社会人の「時間」、高齢者の「時間」、時間の流れが様々であることは、生活の中で誰もが感じることである。

家庭科教科書の「時間」は単調に流れるが、私たちの生活時間は重層構造ととらえることができる。合理性を追求する時間だけでなく、自然の時間の流れ、非効率でコントロールできない時間、時間の一つではないことを家庭科は教えたほうがよい。

少子高齢社会、男女共同参画社会では、生活時間の重層構造を理解し、時間意識の使い分け、多様な時間意識のバランスをとることが必要である。

ところで、1日は24時間ですべての人に平等だが、トキは、モノ・カネとは別の意味で偏在している資源でもある。1日の生活時間配分だけでなく、一生の時間配分をみれば、時間に追われ忙しい時期と、リタイア後の時間を持って余す時期、生活時間配分には偏りがある。

家庭科の教科書は、時々さし絵や写真に高齢者を登場させて、祖父母などがいる拡大家族を連想させている。しかし、高齢者の「時間」の流れ、祖父母の「時間持ち」に触れていない。

高齢期は様々な面で格差が大きい、モノ・カネ・トキを豊富に持っている高齢者もいる。たとえば、孫へ教育費を贈与する（家庭科の「お金」については次稿で述べたい）、孫のために時間をつかう祖父母も多い。

高齢社会、超高齢社会では、高齢者の大量の時間資源を無視することはできない。家庭科は、1日の生活時間配分だけでなく一生の時間配分も考える必要があるだろう。

注

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 家庭編』東洋館 2008, p.10.
- 2) 同上, p.21.
- 3) 同上, p.21.
- 4) 同上, pp21-22.
- 5) 小学校家庭科教科書『わたしたちの家庭科 5・6』開隆堂 2011.
- 6) 小学校家庭科教科書『新しい家庭 5・6』東京書籍 2011.
- 7) NHK 放送文化研究所『日本人の生活時間 2000』日本放送出版協会 2002.
- 8) NHK 放送文化研究所『日本人の生活時間・2005』日本放送出版協会 2006.
- 9) NHK 放送文化研究所『日本人の生活時間・2010』NHK 出版 2011.

- 10) 文部科学省『小学校学習指導要領解説
家庭編』東洋館 2008, p.10.
- 11) 溝上慎一『大学生の学び・入門』有斐閣
2006, pp.79-82.
- 12) 浅尾幸次郎ほか『広げる知の世界 大学
でのまなびのレッスン』ひつじ書房 2006,
pp.21-24.
- 13) 小原芳明『大学生生活ナビ』玉川大学 2006,
pp.44-61.
- 14) 梅棹忠夫『女と文明』中央公論社 1988.

